

日本で最初の日刊新聞が横浜で生まれたのは明治三年のこと。一世紀を超える紙齢の新聞が数あるなかで、昭和四十六年創刊の小紙は日浅いとはいえ、創刊一万号を重ねました。今日に至った背景には何よりも松本平の文化性、民度の高さがあると思います。さらに明治以来、数多くの地域紙が進取の精神で培ってきた豊かな土壌にほかなりません。本日を迎えられたことに読者、広告主、販売店など関係各位に厚くお礼を申し上げます。

明治五年、全国的にも早く松本で信飛新聞が発行されました。創刊にかかわった市川量造は競売された松本城を解体から救いました。市川、松沢求策は後の松本新聞で自由民権思想を鼓舞、国会開設運動に身を投じた先覚者。作家の木下尚江は信陽日報記者時代に分県移行反対論を述べ、廃刊に迫り込まれました。信濃日報代表の降旗元太郎は代議士として普選法案を通過させた一人です。

やがて満州事変から国家の言論統制が始まり、廃刊、統合へのいばらの道。戦時中は一県一紙に統合されたのでした。

戦後の一時期、地域紙の空白が続いた松本で、市民の間から「身近なことを知りたい」という声が上がって、小紙が生まれたのは三十二年前。この年はニクソン・ショックに代表される激動の始まりでした。最初はタフroid判四六建てで、松本市内をエリアとしました。十数人の社員が編集や広告、販売面で日夜飛び回るといふ創刊期の苦勞を重ねたものです。

読者ニーズにおこたえして四六から六六へ、さらに八八へと増やし、経営が軌道に乗ったのは十二年後のことでした。現在は二十四―三十二六建ての発行で、社員数は約九

十人。全国に多くの地域紙がありますが、一昨年には日本の主な新聞、通信、放送各社が組織する社団法人日本新聞協会加盟社の一員となりました。

地域紙ではいち早くコンピュータによる紙面編集を始めたほか、各種新鋭機器を導入して速報とカラー化を進めました。よりの地域の生活に密着した新聞として松本版のほか安曇野版、東筑北部版、塩尻版を順次発行することも、情報基地と地域に開かれた新聞社として多目的ホールを併せた安曇野支社、塩尻支社を建設しました。その山光ホール、塩尻ホールは地域の皆様に幅広く活用していただ

創刊1万号を迎えて

市民タイムス社長 新保 力



いております。

創刊一萬号という記念の今年、松本市和田の臨空工業団地の印刷工場に印刷センターを新設しました。

ここではタフroid判最大四十六(うちカラー二十四六)一、二時間当たり五万四千部を印刷する新鋭のタワー型輪転機の稼働を控えております。広域地域紙として一段と充実した情報の提供と明るいカラー面が増えることとなります。

小紙は創刊時に「市民がつかえる市民のための新聞」を「たいまつ」として掲げました。その姿勢に変わりはな

く、だれが必要とする「肌着のような新聞」でありたいと願い、「読者第一主義」「郷土の応援団」として一方に偏ることなく郷土発展への提言などを展開してきました。

新聞は昔の政論中心から報道中心へと変わってきましたが、小紙はさらに読者が共に作る新聞として多様な意見や諸作品発表の場を広げ、世論の喚起や連帯意識の強まりにつながっていると思います。その大きな表れは歳末「おもいやりボックス」に寄せられる多くの善意にもみることが

できます。各界の方々の執筆によるリレーコラムの執筆者の一人、前東京外語大学長の中嶋嶺雄氏は以前、「広域コミュニティの時代」のなかで、「市民タイムスは広域コミュニティ紙として、わが郷土が全国に誇るべきものであり、発行部数をもとより、住民人口に対する普及率、そしてあえて表現すればその「熟読率」がきわめて高いことにおいて、とびぬけた存在だといえよう」と述べられました。

小社は新聞発行のほかに各種の文化、スポーツ事業などにも取り組んでまいりました。本年は豊科町の生んだ異才、奥村光正氏(故人)の展覧会を二十一日から五月五日まで、松本市美術館開館一周年記念展と市民タイムス一萬号記念展として開催致します。一萬号記念ではさらに五月二十二日、ハンブルク北ドイツ放送交響楽団の演奏会を県松本文化会館で開催する運びです。

地方の時代といわれて久しく、超高齢化社会へ向かうなか、地域の暮らしの再評価とともに、地域紙に課せられた役目はますます重くなると思います。開かれた住みよい郷土づくり、そのための「核」となる地域紙でありたい、と願っております。